東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

小規模校日本人学校における来入児の受け入れ体制作り：現地の幼稚園から来る子ども達のために

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2022-07-28
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小松,秀樹
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2309/00174253

小規模校日本人学校における来入児の受け入れ体制作り

── 現地の幼稚園から来る子ども達のために ──

前アグアスカリエンテス日本人学校　教諭
長野県塩尻市立桔梗小学校　教諭　小　松　秀　樹

キーワード：小規模校，中南米，現地校からの来入児受け入れ，スムーズな学校生活の立ち上げ

１．はじめに

世界中に数多くある在外教育施設の中から，アグアスカリエンテス日本人学校（以下本校と略す）という中南米の小規模校に赴任する機会を得た。このことは，私にとってどのような意義があったのか，私の今までの経験を生かしてこの学校のためになれることはないのか，三年間考えながらあれこれと取り組んできたつもりである。

その中でも，私なりに取り組むことのできたことの一つが，今回紹介する現地校から来る来入児の受け入れ体制を作ったことになると思う。大まかではあるが，立ち上げからの取り組みを紹介したい。

２．アグアスカリエンテスの幼年教育

アグアスカリエンテスは，メキシコ中央高原に位置する人口70万人ほどの地方都市である。近年日本の自動車メーカーが，相次いでメキシコに生産拠点を設けていることは日本国内でも話題になっているが，アグアスカリエンテスはその先駆けとも言える地である。中南米最大の自動車工場と20社ほどに及ぶ関連企業の社員と家族が，アグアスカリエンテスには500名程住んでいる。小さな日本人コミュニティのため，日本人学校以外に日本語の学習環境は当然無く，未就学の子ども達は現地の幼稚園でメキシコ人と一緒に学ぶことになる。日本のような幼保小の連携は期待できない。そんな中で６歳の３月までを現地の幼稚園で過ごした子ども達は，現地の幼稚園を退学（修了が６月のため）して本校に入学してくる。

現地の幼稚園に通う日本人

３．それまでの体制

それまでは２月に来入児と保護者が来校し，来入児は低学年児童との交流，保護者は学校体制や学用品等についての説明会を行っていた。低学年児童との交流については，行動観察等は行っていなかったため，児童の行動面や学習面の具体的な姿については４月に受け入れてから担任が徐々に知っていくというのが現実であった。狭い日本人社会なので，事前にある程度の様子は知ることができている。だが，私が本校に赴任した４月当時，職員室で「この子は顔つきがしっかりしているから大丈夫」「お兄さんは落ち着いているから心配ないでしょう」という会話が聞かれていた。入学して時間がたつにつれて当初の予想と実際の姿にギャップが出てくるのは，ある意味当然といえた。１年生を担任していた先生の苦労を思うのと同時に，「改善できるのではないか」という思いがわき上がってきた。

４．改善に向けて

(1) 立ち上げ

私は原籍校での４年間，小学校の１・２年生を担任していた関係で，ずっと就学前の担当をさせていただいた。毎年160人ほどの来入児を受け入れるにあたり，特別支援コーディネーターの先生と協力しながら，特別支援が必要な児童がスムーズに小学校生活のスタートが切られるようにと，一人ひとりの支援の方向を探っていった。そのノウハウを生かせるのではと思い，学校体制で来入児の受入体制を作ることを提案した。

本校は，教頭職を置いていないため，教務主任の先生と具体的な部分を時間をかけて話し合い，企画会などで意見を戴きながら内容を詰めていった。

日本であれば発達検査や健康診断など，教育委員会と連絡を取り合いながら進めていく物が多々あり，当初は学習面の把握を柱に行いたいという思いで提案をしていったが，日本人学校では予算等の関係もあり，実現は難しいという結論になった。

(2) 生活面の支援を柱に

そこで，ねらいを

・体験入学で来入児の実態を把握することで，４月の学級運営（特に生活面）をスムーズに行う。
・前年度把握した情報を，次年度の１学年担任に伝え，４月当初の負担を軽減する。
・本校で継続的に取り組むことのできる，就学前教育の体制作りをする。

と設定した。そして，そのために必要なデータを集めるにはどうすればいいかについて考えた。原籍校等の情報を取り入れていく中で視点を絞り込み（右図参照），体験入学を行うことになった。

体験入学の流れ

流　れ	主な視点
移動	・スムーズに親から離れられるか
靴の履き替え	・靴の整頓
名前の記入	・名前を書くことができるか ・利き腕はどちらか ・順番を守れるか　等
トイレ	・お尻を出していないか ・手を洗っているか ・ハンカチの利用　等
オリエンテーション	・挨拶の声，言葉遣い
集団遊び ・縄跳び遊び	・子ども同士の人間関係 （まとめ役，遊びの工夫，孤立等）
絵本読み聞かせ	・話を理解しているか等
個別面談	・緊張感，視線，言葉遣い等

(3) 観察の視点を明確に

視点は，日本で１年生を担任する際，幼稚園や保育園からいただく情報で特に参考にした部分や，私自身の今までの経験を基に，必要性の高いものを中心に，最低限のものに絞り込んでいった。

そして，一日体験で観察を行う際の主な視点として

①トイレの使い方（お尻を下げない，手を洗う，ハンカチを使う等）
②利き腕の確認
③自分の名前をひらがなで書くことができるか
④集団行動をとることができるか

の４つをを設定した

①②については言わずもがなである。③については，外国生活ならではの視点といえるだろう。スペイン語環境で育ってきたためにひらがなが身についていなかったり，ひらがなであっても「はなこ　たなか」のように名字を後に書いたりするなど，実態は様々であった。④の集団行動については，ただ自由に遊ばせるのではなく，児童数

に対し，それより少ない本数の縄跳びを使って遊ぶという環境を意図的に作り，その中で児童がどのように関わり合うかを観察した。実際に行ってみると，5 人前後のお互いに知り合っている中でも，子どもなりの人間関係が構築されており，縄跳び遊びの際にそれを垣間見ることができた。

5．成果

成果としてあげられるのは，やはり，児童のつまずきを事前に予想できたという点が大きい。

具体的にあげると，

①については，授業終了後に該当児童に対して，ピンポイントで支援することができ，トイレの使い方（衣服の着脱も含める）の的確な指導と短期間（1ヶ月程度）での改善を行うことができたことが成果としてあげられる。

②については，左利きの子を右利きの子の右隣に配置することがないよう，入学式から席順への配慮を行うことができた。結果として不要な席替えを防ぐ事ができ，4 月当初の生活を落ち着いて過ごすことができたことは大きな成果と言える。

③は，前述したとおり，日本人学校ならではの視点といえる。特にメキシコで幼少期を過ごした子どもたちにとって日本語の読み書きのハンデは大きい。4 月当初の学習への配慮には欠かせない視点であった。

④については，4 月当初の緊張感を持った学校生活を過ごす子どもたちにとって，担任が人間関係に配慮するには欠かせなかった。本校は保護者が中心となって，年長児～中学生対象のサッカークラブを立ち上げており，多くの園児が在籍しているが，そこで見せている人間関係とは若干違った様子を体験入学で知ることができ，4 月当初に配慮して支援していくことができた。

ざっとではあるが，上記の点が上げられるだろう。メキシコの園で就学前教育を受けてくる子どもたちが中心のため，日本の園で学んでくる「しつけ」や「集団行動」は，基本的に小学校入学後に身につけていくことになる。そういった子どもたちが，4 月当初の生活で受けるストレス（日本とメキシコの学校生活のギャップ）を多少なりとも軽減させることはできたと思う。

それは，初年度に観察した 7 人の児童を私自身が 4 月から担任をし，観察のデータを参考に 4 月の学級経営を行うことができた点からも，成果を身をもって実感することができたといえる。

6．課題

では，課題は何であろうか。一番は，ねらいの 3 つめに掲げた「本校で継続的に取り組むことのできる体制作り」であると感じた。何もなかったところに仕事が一つ入ると当然負担感も増す。あれもこれもとお願いしては，せっかくのシステムも長続きしない。私自身もそうだが，実際に来入児の受け入れを経験しないと，その必要性は実感しづらいのが正直なところである。本校の場合も，職員組織は中学の先生が中心で，小学校経験の明日先生も低学年経験者はいなかった。そういった先生方に本来の趣旨を理解していただき，学校体制として取り組んでいただくために，特に立ち上げの段階で配慮を要した。

また，1 年目は全職員の体制で観察を行ったが，職員が少なくても十分対応できるという反省から，2 年目・3 年目は就学前担当職員中心に基本的な対応を行うこととし，極力職員の負担もかからないようにしていった。

私としては，本当に必要最低限の体制を整えたつもりであるが，これを今後続けるかどうかは今後本校に赴任した先生方に判断していただければいいと思う。ただ，立ち上げた者として願うのは，4 月に現地の幼稚園から本校に入学してきた子どもたちが，それまで受けてきたメキシコの教育を生かしつつも，「日本人学校は楽しいな。」と感じながら日々学校に通ってくれることである。この根本的な部分をふまえて，慣れない異国の地で幼年教育を受けてきた子どもたちが，日本人学校での 4 月のスタートをスムーズに切られるために，本校が行うことのできる一番いい方法を検討していっていただくことを願ってやまない。全ては「子どもたちのため」に立ち返るのだと思う。